

がら寄ってきた。

私は、この少年がひそひそ声で「森でのおしゃべり」について話してくる姿を見て、「森でのおしゃべり」は、たくさんの人がいる村の中とは異なる特別な状況下で行なわれるものだと感じた。そこには、なにか秘密の共有めいたものがある。

ワンバ村では、住居の裏には森が広がっており、人々は日々の生活の中で、日常的に森での仕事を行なっているのだが、森の中で複数人集まって話をするというのは、「特別感」というか、その場にいる人だけが共有できる秘密の何かがあるように感じた。男性が森の中でヤシ酒を楽しむ時には、決して妻や子どもには聞かれてはいけないこと、子どもが森でおしゃべりをする時には、母親や他の兄弟や友だちには内緒にしたいことを、こっそり

みんなで共有しているようである。多く人々がいる「村」と、自分の近しい人だけで入る「森」という場を、一見境界がないようにみえても、子どもや男性は異なる場として認識しているのではないだろうか。

もちろん女性も、女性同士の会話を、男性や子どものいない時、たとえば畑や森での採集活動、水汲みや洗濯の時などに楽しんでいるのだろう。

こうして時々秘密の会議に招き入れられると、ワンバの人に受け入れられたような気持ちになり、内心少し嬉しい。子どもや男性の日々の生活の中にも、私の調査のヒントは潜んでいるのではと思う。今後も「森に行こうよ」と言われたら、二つ返事で同行させてもらい、秘密会議に出席させてもらいたいと思う。

カンボン 失われつつある居住地とそこに生きる人々

水 野 久仁香 *

市街地へ向かうバイクや車がひっきりなしに行き交うスディルマン通りの橋の上から、下を見下ろせば川沿いに広がる家、家、家…

インドネシア語で谷 (lembah) といわれる、ジョグジャカルタの町に流れるチョデ川

の斜面。そこにある居住地を初めて訪れたのは、もう3年前のことだ。2012年4月、私はジョグジャカルタにあるガジャマダ大学の先生に連れられてやって来た。居住地の入り口を示すガプラ (gapura) という門をくぐ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真 1 眼下に広がるチョデ川の光景

り、崖のような川の斜面をくだり、橋の下へ向かっていく。すると竹でできた色とりどりの家がひしめく迷路に迷い込む。そこには会釈をするにつこりと笑顔で返してくれる老婆や元気に走り回る子どもたちがいた。

インドネシア人の故郷—ジョグジャカルタ

何千もの島から成り立つインドネシアのジャワ島の真ん中に、ジョグジャカルタ特別州がある。ジョグジャカルタは、かつて数多くの王国が栄枯盛衰を繰り返した末に誕生した王朝の都である。この地が特別州と名付けられ、ジャワの古都としての地位を保っている理由は、町の王宮に今も暮らすスルタンと呼ばれる王様の存在が大きい〔佐藤ほか 2002〕。

ジョグジャカルタには、断食明けや祝祭日の重なる長期休暇になると、全国から観光客が訪れる。町中の宿泊施設はすぐに満室になってしまう。時代を問わず、ジョグジャカルタは、人々の休息地であり、故郷なのであろう。

また、ここでは創作活動が盛んだ。伝統的なジャワの芸術はもちろんのこと、芸術家や若者を中心に、政治や宗教など社会的タブー

に切り込んでいく鋭い作品を制作する人たちも多い。社会の多様な人間を受け入れる、寛容な町としてジョグジャカルタは発展している。

裏路地の世界、カンボン

カンボン (*kampung, kampoeng*) は、マレー語もしくはインドネシア語でムラ、集落といった意味合いがある。その発生経緯は、計画的に建てられた住宅地とは対照的に、農村や地方からの流入者が脇道を埋め尽くすように家を建て、やがて迷路のように密集した集落を作り出したと考えられる。

カンボンの居住者は貧困層が多いといわれる。密集していて小汚いため、スラムのような様相を呈しているが、必ずしもマフィアや薬物中毒者が潜んでいるような危険な場所ではない。住民たちは決して裕福でないものの、コミュニティの冠婚葬祭や年間行事を通して同じ時間を共有し、毎日たわいもない冗談に花をさかせている。これまで多くの研究者が、都市部のカンボンに、インドネシアの農村の穏やかな人々の暮らしを重ね合わせてきた。

また、カンボンは地域ごとに呼び名をもっており、その由来は土地の歴史やかつての人々の暮らしを想起させるものも多い。たとえばジョグジャカルタでは王宮の馬を世話していた家臣ガメル (*gamel*) たちの居住地カンボン・ガメラン (*gamelan*) や、王宮に献上する家畜を屠殺する家臣ジャガル (*jagal*) たちの居住地カンボン・ジャガラン (*jagalan*) などである〔Setiawan 2010〕。ただ、私が訪れるのは王宮の歴史とは関係のない居住地で

ある。カンボン・チョデといわれるこの場所は、チョデ川という河川のわきにひっそりと出現した。1960年頃、まだジョグジャカルタの人口も少なく、チョデ川の周辺が木々で覆われていた頃、近隣の県などから土地も家もなく放浪していた者が集まってきて、掘建て小屋を建て、暮らし始めた。つまり不法占拠によって出現した居住地だった。その後、スハルト権威主義体制の度重なる居住地の撤去政策に耐え、このカンボンは激動を乗り越えていく。

カンボン・チョデと反政府運動

チョデ川の周辺に発生した居住地は、しばしば川の氾濫による被害を受けていた。今でも雨期になると一度は大洪水が起これとチョデ川付近の居住者はいう。1984年に、ジョグジャカルタには大雨が降った。それにより河川敷およびその付近で家屋30棟が流出、156棟が浸水、339棟が被害を受けた〔平尾ほか 2003〕。その後ジョグジャカルタ政府は河川敷の居住地の一斉撤去に乗り出す。その理由は、洪水の被害から居住者を守ることだったが、住宅に火を付けられたり壊されたりしたこと、おそらく政府は違法な者たちによって占拠されていた河川敷を、一掃してしまいたかったのだろう。カンボン・チョデをはじめとする貧者たちは、あてもなく逃げ出すしかなかった。

しかし、マングンウィジャヤ (Mangunwijaya) という人物は、ジョグジャカルタ政府の強制的な居住地の撤去に猛反対した。彼はインドネシアの有名な国民的作家、建築家、牧師そ

して活動家であった。強制撤去の始まる前の1983年から、すでに弟子たちとともにカンボン・チョデに住み始め、居住者の社会経済的な向上や住宅建設に努めていた彼はジョグジャカルタ政府の強行的な開発手法に異議を唱え、周縁化された不法占拠者の自立を促す支援の必要性を訴えた。そしてそれが学術関係者や教会関係者を巻き込み、世論に大きな反響を呼んだのである。

このような必死の抗議活動が実を結び、カンボン・チョデおよび河川敷の多くの居住地が撤去を免れた。カンボン・チョデの場合、住民の土地の所有権は認められなかったものの、正式なカンボンとして自治体に登録され、居住者は社会サービスを受けることができるようになった。そして再び、カンボンには穏やかな日常が戻ったのである。

変わる景色と変わらない景色

現在、インドネシアのカンボンは消滅の危機にある。なぜならば都市部の近代的開発や利便性向上に伴って、民間企業がカンボンの土地を買い占めているからだ。住む場所を失った人々が移住を迫られる例は少なくない。

しかし今のところ、ジョグジャカルタのカンボン・チョデは生き残っている。カンボンができてから60年ほどが経過した。ここでは活動家であるマングンウィジャヤがモットーとしていた「貧者の自立」が受け継がれ、住民とNGOなどの活動が維持されている。住民たちは頼母子講、宗教行事、地元の学生との文化交流に勤しむ。そのようなカンボンの経緯や取り組みが全国的に知られ、不



写真2 チョデ川付近に建設中のホテル

法占拠で出現したカンボンの成功例として紹介する知識人も多い。ただ、居住者の多くは今も非常に貧しい。カンボン・チョデの実情を知って私が驚きを隠せないのは、今でも他地域からの貧しい放浪者がやってきて、密かに橋の下に身を寄せ、住みついてしまうことだ。河川敷の、橋の下にあるカンボンは、身分も生まれもわからない人間をかくまってくれるような避難所なのか。時代が変わっても、貧困はこうやって同じ場所に再生産されるのか。

2014年8月17日、インドネシア独立記念日前夜の祝賀会がカンボン・チョデで開かれた。私は川沿いに建てられたステージの前に敷かれた御座に座って、音楽を聞いたり、住民とおしゃべりをしたりして楽しんだ。乾いた風が川沿いへ吹き込んで、とても気持ちがいい。ふと、私が座しているところからオレンジ色の街灯がともる橋を見上げる。橋の上にも多くの若者がたむろして思い思いの時間を過ごしているが、橋の下には限られた者しか入れない。まるで自分は別世界にいるようで、なんともいえぬ安心感を覚えた。



写真3 カンボン・チョデの入り口

遠く離れた私の故郷

朗らかで楽しそうなカンボンの暮らしといても、2,509 m²ほどの川の斜面に160人が生活しているため、実は話はそう簡単ではない。妬み、金銭トラブル、家族の断絶、そこに住む人間の泥臭いドラマが日々展開されている。しかし住民が語る長い長いインタビューは、「まあ、人間だからしょうがないね (*kan, namanyamanusia*...)」といった、どこか開き直った言葉で締めくくられる。

こうやって、今日もチョデ川の人々の平凡な暮らしが続く。私は遠く離れた日本で、またあの泥臭くて温かい世界に戻りたいなとふと思っては、インドネシア人が大好きな Facebook をおもむろに開く。するとカンボン・チョデの住民たちが載せる日常の光景が目飛び込んでくるのである。

引用文献

佐藤愛彦・俵 純治・染谷臣道. 2002. 『NHK スペシャル アジア古都物語 ジョグジャカルタ 支え合う王と民』日本放送出版協会.
平尾和洋・高尾克樹・瀬戸口健・長谷川豪. 2003. 「インドネシア・ジョグジャカルタ市のロモ・マゴン・カンポンの居住環境改善経過に関する

考察」『日本建築学会計画系論文集』574: 105-112.

Setiawan, B. 2010. Kampung Kota dan Kota Kampung: Potret Tujuh Kampung di Kota Jogja. Pusat Studi Lingkungan Hidup Universitas Gadjah Mada.

ジャカルタパンクと政治

金 悠 進*

ああ マルシナ あなたは取り残された
ああ マルシナ あなたの死は無駄にはな
らない

(MARJINAL／「マルシナ」*Marsinah*)

2014年9月、インドネシアの首都ジャカルタで、モヒカン頭に全身タトゥーをしたパンクロックバンド、マージナル(MARJINAL)が「マルシナ」の歌を歌っていた。私はその路上ライブを静かに目に焼き付けながら、彼らの歌から込み上げる怒りと、そこに秘められた切なさのようなものを感じた。

労働運動が厳しく制限されていたスハルト権威主義体制期の1993年、女性労働者マルシナ(Marsinah)は労働運動を率いたことから、24歳の若さで軍に虐殺された(「マル

シナ事件」)。マージナルは彼女の死を無駄にしないために、バンド名をMARJINAL(インドネシア語読みで「マルジナル」)にした。ボーカルのマイク(35)は、1996年、21歳のとき、ジャカルタ芸術大学(IKJ)在籍時に「打倒スハルト」の学生運動に参加した。マイクはデモの途中、ベース・ウクレレ・コーラスを担当する相方のボブに出会った。ふたりは「デモだけでは何も変わらない」、「この運動をさまざまな表現でサポートしなければならぬ」と考えた。しかし、言論と表現の自由が抑圧された中でスハルト独裁体制に抵抗するためには、何か工夫を凝らす必要があった。マイクとボブのふたりは仲間とともに、タトゥー、版画アート、そしてパンクを始めた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科